同族とその変化

同族団とその変化

——はしがき——

昭和三五年日本社会学会第三三回大会のシンポジウムにおいて、「同族とその変化」がとり上げられ、その討議が行なわれた。今その内容の刊行に際し、この問題の意義をのべておきたい。

同族団の研究に今日的な意義があるかということがこの問題に含まれているように私には思われる。それは端的にいうと、今日農村において、一般に同族団が大きな意味を持たないばかりでなく、もはやその機能をほとんど喪失しているという現実に多くぶつかることから来ている。私のような戦前派の社会学徒にとっては同族団への関心は消えないが、戦後派の若い人々にとってはそれはもはや、何等の魅力もないし、もっと別の所から出発する方が農村を理解することが出来ると考えているように見える。このことは戦争を境にして農村が急激な極めて大きな変化をしたことを私達に示している。

有賀喜左衛門

しかしよく考えて見ると、戦後の急激な変化によって同族団の機能が急に減退したのではなく、所によっては江戸時代からすでに崩れはじめているし、明治・大正・昭和の時代的経過の間に次第に崩れた所もあり、逆にそれが強化され、変形された場合もあったが、第二次大戦に突入し、戦後一斉にこれが崩れて来たということであると思う。

私をはじめ、喜多野清一や故及川宏などが同族団の定義づけに苦心して農村を歩き廻っていたのは昭和五年頃から第二次大戦終焉までの時期であった。少くとも私自身についていうなら、東北地方において本家と末家とが主従的關係で密接な互助關係を持つ家連合を形成し、その本家が雇人夫婦を含む大きな家族構成を持っている耕作地主であることを発見したことが、自分の郷里や其他において断片的に残っていたり、あるいは変化して一般化したいろいろな社会現象の源流をう

まく説明してくれることに気がついて、小作制度の起源を家制度に結びつけて明かにしようということになった。同族団の定義づけは及川や喜多野に教えられて、同族団研究に参加することになったが、当時私が同族団の源流について特に多くの力をさいたのは、同族団の基本的性格を知らなければならなかったからである。このことは私をして歴史研究にかなり多くの力をさかせた。そしてその当時の私の農村観察に同族団偏重の傾向を持たせたことも事実であった。それは今日反省する所ではあるが、農村における一つの顕著な事実を追求するためにはやむを得なかった必然の成行でもあった。同様のことは農村研究の今日的関心の中にも見られることであって、正しい配慮を持つことは大いに望ましい。

同族団はその当時すでに大いに変わりつつあったとしても、農村研究ないし日本社会の研究にとって重要な課題であったことは争うことはできない。このように変わりつつある現象をとらえて、それをさかのぼってその原初的形態や内容を復原することは必要ではあったが、その半面その変化して来た形態や内容をとらえることがそれにもまして必要であつたはずである。私自身に關する限り當時は主として前者に即いた。そしてその変化する過程の研究にはうとかつた。しかし一般に當時の研究を見ると特定の同族団の変化過程にある一形態を以て同族団の基本的性格としようとする傾向が強かつた。こういうことは同族団の研究に限らず、その他の研究について今日でも非常にしばしば見られる所である。したがって研究者は自分が主として調査した特定の同族団の現実の姿に多く影響されたように見える。同族団の異なつた姿は、特定の同族団がその地域社会の特定の社会的諸条件に規制されて、種々の形態を示した場合が多かつたと思われる。したがって私

達はもっと各時代の政治的・経済的・社会的諸条件と地域社会の特定の諸条件とを十分考察した上で同族団の基本的性格とその歴史的变化とを検討して見なければならなかつた。同族団のように古い時代に発生して、その長い生命を持った社会現象にはそのような考え方が特に必要であつた。

所で當時における同族団研究はその内部構造の多様性に目を奪われて、その研究にとどまっていたように思われる。それ故議論は同族団の基本的性格に中心があつた。そして議論の焦点も大体は二つであつて、一は同族団における家の本末の系譜關係は本家と末家の各家長の主従關係に基き、この關係を中心とした本家中心の互助組織から発生したものであるという説であり、二は本家は系譜の本源であるから權威を持ち、この關係を双方で認知しあうことに同族団成立の根拠があり、したがって主従關係は同族団に結びつき得るとしても、それを発生させる理由とはならないと説いていた。この両説にはそれぞれ多少の欠点があつたように思われる。第二説の欠点は本家の分家に対する權威は系譜の本源であることによって生ずるとした点である。なぜなれば分家を出すことは本家の経済的優位なしではないからである。そしてそれに伴う政治的・社会的地位の優位があつたことを忘れてはならない。村落において各個の家がその政治的・経済的・社会的条件によつて格付けされた家格を持っていたことは昭和戦前にはまだ相當に顯著であつた。しかし本家の權威は常に不動ではなく、その没落衰退と共に失われることも通例見られたのは、その權威の根拠が何にあつたかを示している。本家の衰退没落によつて有力な別本家が成立し、新しい同族団がこれを中心に形成されたことしばしば生じた。それにしては特定の家の本家傳承が村の人々によつて認められていた場合

に、衰退した本家の権威を同族神の祭祀においてわずかに認めることなどは少しは見られた。本家は過去においていくつかの分家創設を行い、それらの分家を同じ村に置いて互助組織の中心となった限り、本家の権威をみとめる風習は通例であった。そしてこれらの場合本家長と分家家長とが主従関係でなかった場合は極めて多かった。なぜなら分家家長は多くは分家以前は本家の傍系成員であったし、昭和戦前に近親の傍系成員が嫡系成員を主人として雇人の如く仕える風習は一般に農村にはなかったからである。この意味では第二説の説く所は正しい。

第一説は、同族的系譜（家の本末の系譜）は根源的には主従関係から出たと主張していたが、当時の現在の同族的系譜がすべて主従関係だと見ているのではなかった。これにおいては歴史的な変化を考えていた。それ故前の時代にさかのぼればこの形はますます多く見出されるのであったが、古い時代にさかのぼってもそれが唯一の形態であるかどうかの考察が足りなかった。日本の村落においてはその自治規制により各戸が形式的平等の持分を持っていたことはほとんどなかったと思う。原始時代のことはわからぬとして、江戸時代には耕地や宅地の平等分割をした新田も生じたが、これらは自治規制が平等性を要求した結果ではなく新田開発の計画によって生じたものであった。したがって社会的条件によって不平等になる可能性が多かった。戦後の開拓村にも平等分割の生じたものもある。これも同じ可能性を持っている。偶然に各戸が比較的平等な持分に落付いた村や同族団もいろいろな時期に生じた。このような条件におかれた同族団は第二説にとかれた形態のものが多し。同族団が主従関係を以て発生したのでない場合はたしかにあったと思われる。

そこで問題は家の本末の系譜の意味にある。これは各家に存する個別的な家の系譜とちがうことは明かである。家の本末の系譜とは二つの家が、一方を本家とし一方を末家とし、家の出自ないし社会的地位をきめることである。本家が権威を持つのは末家の創設に当り末家に對して一定の家産を与え、さらに自活するためのあらゆる配慮を与えたからであり、それなしには末家は家としての存立を勝ち得なかった。そういうことは外に十分な雇用もないような社会的条件がそこにあったことを意味するから、それはそういう政治的・経済的・社会的条件を前提とする。これが同族団の成立する前提条件なのであった。

つまり日本の過去の社会的条件は離島という慢性的鎖国状態における、国際的経済の連帯は發展せず、政治は分国領主の封鎖政治が比較的長く続き、これに伴って苛酷な徴税政策や、社会救済政策の欠乏などが生産力の伸びなやみに深刻に影響したので、人々は自己を守ることを家を守ることによって果すべく全力をあげた。又一家を守ることだけでは困難であったので各種の家連合によって家の永い存続を求めた。同族団はそういう家連合の一つではあったが、これは一家の創設に最も関係の深い家連合であるという意味では他の家連合とちがっていた。一家の創設は直ちにその生活の維持とも関連したから、家の本末の系譜と彼等の家の互助組織とが最初から緊密に結びつかなければならなかった。だから一つの家が他の家から分れたということだけで家の本末の系譜がきまったのではない。この系譜の意味には元来は一定の互助関係を結ぶ意味もあったし、さらに特定の本家の持つ政治的・経済的・社会的勢力のうちに属するという派閥としての意味もあった。近年に至るに従ってこれらの生活関係から本末の系譜だけが切りはなされて来たので、史学などで使用された出自という言葉の意

味も系譜だけのものとして解釈される事になって来たのである。昭和戦前にすら見られたし、現在は沢山見られる自力の分家創設の場合、名目だけ生家を本家と称しても、この家の本末の系譜に関する意識は明らかに前のものとはちがっていた。ここでは生活関係（特に互助関係）を持つ必要もなくなっている。前の規準から見たら特定の家の分家と見るべきではない。家の本末の系譜の考え方は元来は双方の家の社会的地位の不平等を根拠として、本家を出自とすることにより、それへの精神的か物質的かの依存を求めている。これが主従関係でないかどうかは、主従関係という言葉の意味によってきまるであらう。

主従関係という言葉は封建社会の君臣や企業者の主人と雇人と思ひ浮ばせる語義がすでに一般に成立しているの、同じ言葉を簡単に他に用いることはできないが、家における嫡系成員（例えば長男）と傍系成員（次三男）との関係を見よう。昭和戦前に農家などにおいて両者の関係は通例主従関係と見られてはいなかった。両者は言葉の上でも意識の上でも主人でも従者でもなかったのに、その待遇については厳しい差別があった。同一の父母の子供であるのに嫡系成員は家のあととりとなり、他はそれから排除された。これは家の存続のために一子相続せねばならぬという社会的条件があったからである。分家に与える財物が少しでもあればまだましであったが、その場合でも一般にあととりの相続分に比して極めて少かった。食糧の場合には傍系成員は幼年にして他に奉公し、奉公先で成人を期待された。嫡系と傍系との関係は感情的には血縁の親近感を持ちながら、経済的・社会的には冷酷な差別があった。一方は家の存続に直接奉仕し、一方はそれから排除されることにより家から捨てられたに近い。そういう生活条件の雰囲気には人は馴らされてこのことを強く感じなかった。

私はこの関係を主従関係と直ちに規定しようとは思わぬが、家の成員を嫡系と傍系とに分けたことやそれに伴う慣習は肉親の愛情を強く抑圧する非情な威力を持っていたことを確認しておきたい。そして他方では家の経営が大きく社会的地位が極めて高い場合に嫡系成員と傍系成員とが明白な主従関係を以て表われていたことと連関して考えておかねばならない。それは昭和戦前をとっても皇室における天皇（あととり）と皇族（次三男）との関係には君臣の関係が表われていたことはその最も特徴的なものであった。

このことは家族構成において嫡系と傍系とをなぜ分けなければならなかったかという問題に根本的に通ずる。そこでは嫡系成員と傍系成員との役割や待遇の差別があったが、その差別の強弱の一つには家の経営、資産の大小や社会的地位の高下によってさだまったのであって、その差別は上層と下層とにおいて強く、中層において比較的弱かったと一般にはいい得るとしても、そういうことはいろいろの社会的条件によってきまったのであるから、さらに時代の政治的・経済的・社会的条件や地域社会のそれらの諸条件が個々の家の生活条件にすべて投影していたことを考えなければならぬ。分家はこの傍系成員の派出によるものだとすると、派出の条件はすべて前述の諸条件によったのであるから、同族団と称すべきものが成立してもその内容は極めて雑多であった。例えば江戸時代には分家を創設することが容易でなかったから、限られた家が本家となり得た。というのは分家しても雇用が少く、独立はむずかしかったから、ある程度の分家財産の分与が必要であり、財産の比較的大きいものが通例なし得たからである。小農の分家もないことはなかったが、それは地主に依存する必要があったから、地主の末家かその出入となることが必至であった。明治以後の

時代には分家が容易となったから、小農と雖も分家を出した。それは雇用が次第に多くなって、分家財産が極めて少くても、あるいはなくてもよかったからである。村から外に出るものが多くなった許りでなく、村落の戸数が明治以後急激にのびた事を見ても、このことはわかる。しかしこの種の小農の村内分家の場合に本家は分家に対して權威を持たなかった。これらは同族団を構成し、何等かの互助關係を結んでいたかも知れないが、同族団の性質は明らかに変わりつつあった。もっと極端になれば自力分家が本家と称する家を持っても、わずかな互助關係を持つにすぎないか、全然互助關係を持たぬ場合もあった。もちろん本家の權威をみとめなかった。

本家を系譜の本源としてその權威を持つことを規定した前掲第二説の場合はやはり比較的古い意味の同族団をさしている。つまり限られた權威ある本家であったがこれらは農村においては比較的大きな地主に表われていた。それには古い家の系譜を誇ると共に現在の資産の大きさを示すものもあったし、明治以後地主への成長によって生じたものもあった。(商家の場合は略す)。これらの場合に比較的大きな直営地を持つ耕作地主は親族分家の外に雇人分家を含む同族団を形成していた。その場合親族分家と雇人分家との待遇の差異(社会的地位のちがい)はたしかにあった。それにもかかわらず親族分家でも、本家との通婚がなかったり困難であったりする風習やその他によって、その關係に階級的差別のあることの明らかな場合が少なくなかった。これにおいても江戸時代と明治・大正・昭和とをくらべて見るとだんだん両者の差別の少なくなる傾向が歴然としていた。第一説ではこういう關係をその起源において主従關係としてとらえたのである。

同族団の種々相をここで語ることはとうてい不可能であるが、村落

の生活が外に向って開け、村落の内外の雇用が大きくなる過程において本家と分家(末家)との關係が変わって来た。分家と本家との互助關係が崩れはじめ、他の分家との關係も替って来て、今迄まとまりを持った同族団もその關係を弛緩させた。村落は家連合の連関、錯綜ないし重層の關係とよくいわれるが、そういう家連合の重点が生活条件に依じて替って来た所に同族団との関連や同族団内部の結びつきの替る原因があった。例えば新しい副業の取容れによって、各戸の経営の変化が、新しい家連合を造り出し、古い家連合との關係を替えた。本家に事家上の權威が失われ、分家の生活の世話をする力がなくなると、家の創設についての義理にしばられることはなくなつたし、それにしばられては生活もできなかつたから、新しい生活關係をとり入れざるを得なかつた。銀行、産組のような金融機關が村内の無尽結合を一掃した歴史もある。産組、農協等による部落組織の改編が古来の家連合のあり方を替えた。村落の内外の諸企業や諸機關への通勤による兼業が生ずると、これによっても家連合は大きく変化した。これらは古い時代(少くとも江戸時代)に生じた同族団が比較的包括的な互助關係として持っていた性格を漸次解体して行つた。だから明治以後新たに生じた同族団の成員は本家が極めて有力な耕作地主などでない限り、相互にそんな包括的な互助關係を持つことは初めから少なかった。

同族団の本家が有力であつた場合に、その同族団は本家の派閥としての意味をはじめに持っていたということは重要である。村落はいつの時代でもその時期の政治体制に把握されそれに対応せねばならない条件にあつたし、その条件において自衛的集團としての自治規制を持つことが必要であつた。したがって家連合はその内部の小さな自衛的集團として構成されていたので、家連合のうちで、その内部組織に権

力構造を持つものがまず派閥として形成された。同族団は有力家を本家として構成されていた場合に、これを中心とする比較的包括的な互助関係が結ばれ、権力構造を示したので、当然派閥として村落自治の政治単位となった。大きな集落において政治的勢力の争いが激烈であった場合に、二、三の同族団が複合して一つのマキとして一つの同族神を祀り、政治的派閥をなしたのもあった。しかしこれらも前述のような同族結合の弛緩が生ずると共に派閥としての意味も喪失して来た場合が多い。外部との関係が多くなると、村落の生活が村内で完結する事態がますます減少し、生活の根拠が外部において主要となった。外部によって多く補足されると――通勤、出稼等――、村落内部の家連合も弱められた。家の創設(系譜)の歴史や先祖元が実生活の上で権威を持たなくなったという許りでなく、新しい利害関係が複雑に生じたので、そういう新しい利害関係を家のために重要視することが必要となって、それを中心にした派閥結合が生じた。新しい行政村の全村的な組織における役職の選挙に再編された派閥が有力に作用するようになった。同族団はこの面でも変った。古来の部落(藩制村)は明治行政村の一部となり、さらに戦後の新行政市町の一部に編入されたことによって、部落役職のウェイトはちがって来た。これらの新しい状況は対外的な大きな政治・経済等の問題を多く生じて、部落内の派閥対立は次第に重要性を失ったことも大きく作用していた。

同族団の変化ないし衰退が戦後に目立ったのは何といっても農地改革による地主の没落と戦後資本主義の急速な発達にまつものといわなければならない。小規模経営の農家が十分な自立性を持ったのではもちろんないが、兼業や通勤への増加によって、あるいは農業経営の改善、機械化等によって古い家連合を離脱したり、再編した結果は同族

団の変化や衰退に作用していた。同族団が従来持っていた重要な性質の一つは末家に対する有力本家のある程度の生活保障の機能やそうでなければ相互の生活保障の機能であったが、これは各個の家の生活に對する十分の保障ではあり得なかったもので、生活条件の変化と共にこれらは次第に捨てられた。むしろ資本主義の滲透に伴う生活条件の変化と共に同族団のこのような機能は發揮できなくなって衰退したと見た方が正しい。

私はさきに戦前の同族団研究は同族団自体について終始したといったが、それは同族団研究の初期の当然の方向であったことを一応は肯定するが、他家連合との関連においてその変化が追求されたなら、もっと実り多いものとなったと考えている。今日同族団が衰退して、それに代る家連合や他の社会関係が多く登場始めたことによって、もはや同族団研究の必要を見ないだろうか。戦後民法が改正されて家制度は崩壊したといわれる。しかし実際には家は減びてしまわぬのは、現実にはそれが性格をやや替えながら存在する必要があるからである。世代家族から一代家族に変化したという確証は果してあるのだろうか。現在の政治的・経済的・社会的条件においては生活の最後の保障を家に求めなければならないという条件は依然として存続している。しかもその家は十分な自立性を持たないものが多い。農村において家連合や村落がその生活を何らかし支持する役割を持つ限り、家連合の研究が農村研究にとって不要とはならないだろう。家連合は同族団との関連においてはじめて十分に理解できることを知らなくてはならない。私は同族団の消滅がもし生じたなら、消滅を生ぜしめた理由に今日の社会科学の問題があると思っている。

Dozoku-dan and Its Changes

—Introduction to the Symposium—

Kizaemon Ariga

Keio University

This is to make a few introductory remarks for the Symposium held during the 1960 Congress of the Japan Sociological Society, on which occasion the present writer served as chairman of the discussion meeting.

Dozoku-dan and Its Changes in Agrarian Villages

Toshimi Takeuchi

Tohoku University

A “*dozoku-dan*”, a group of a main family and its branch families noticed in almost every Japanese agrarian villages, reveals the aspects intricately inter-related with a group of relatives. It is well admitted today, however, that the *dozoku-dan* is of characteristics very different from those of the relative-group. It is the group founded on the lineage of *ie*. Consequently, its membership is always constant and permanent. This feature of the *dozoku-dan* distinguishes itself from the relative-group which undergoes frequent changes in membership from generation to generation, and the extent of organization of which varies from family to family. It is mainly because of this definite group configuration the *dozoku-dan* possesses that it has been regarded as an important element which characterizes the structure of villages.

In order to understand the nature of the *dozoku-dan* further in detail, it seems important to investigate it at the moment of its formation. In other words, it is to examine the conditions in the process of the branch families being established among peasants chiefly in the *Edo* period. With the maneuver of *Kenchi* (land surveys) early in the *Edo* period, the feudalistic land ownership of peasants was settled in outline and the establishment of branch families among farmers was thereafter limited within a village. As a result, the allotment of the farm lands the main family had owned became the basic condition for the creation of new families.

There are two basic types of branch-family establishment. In the first type, the land-owner, carrying on an agricultural enterprise on a relatively large scale, established its branch families in order to have them participate in its own enterprise. In this case, the branch families were not provided with conditions better enough to be independent in terms of economy. Consequently, the member of the *dozoku-dan* in the first type were forced to engage in a collective production